

機関番号：80101  
研究種目：基盤研究（C）  
研究期間：2007～2010  
課題番号：19560659  
研究課題名（和文） 北海道の近代以前における和人とアイヌ民族の建築活動に関する研究  
研究課題名（英文） Building Activities of Wajin(Japanese) and Ainu peoples in Ezo-chi(Hokkaido Island) during the Early Modern Age  
研究代表者  
小林 孝二（KOBAYASHI KOJI）  
北海道開拓記念館・学芸部・研究員  
研究者番号：80142090

研究成果の概要（和文）：本研究は、近代以前における和人の建築活動とアイヌ民族の建築文化を総合的に研究することによって、北海道の建築史を、日本における建築史の中で正当に位置づけるための基礎的研究とする事を大きな目的とした。具体的な成果として、近世期の蝦夷地における和人の建築活動について、その実相の一端を明らかに出来たことや同時期の建築活動にかかわる史料を集成したことなどが成果としてあげられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this paper is to consider on the Building Activities of Wajin(Japanese) and Ainu people in Ezo-chi(Hokkaido Island) during the Early Modern Age. We carried forward this study by following steps. At first we collected the source book of Building Activities of Wajin(Japanese) and Ainu peoples. We made it clear that there were various structures in the buildings.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：建築史

科研費の分科・細目：建築学、建築史・意匠

キーワード：建築史、運上屋、会所、番屋（家）、アイヌ民族、チセ

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は平成8年以降、アイヌ民族の住居（チセ）・建築施設に関する研究を科学研究費補助金を受けて実施し、近世以降のアイヌ民族の住居に関する多くの研究成果を蓄積し、その成果を順次発表してきた。

一方、同時並行して主に明治期以降の北海道の住宅史について、主に本州以南からの移住者による建築文化の導入と変遷、洋風建築技術の導入過程との関連の2点に着目して研究を進め、公表してきた。

本研究では、北海道の民家史・建築史に関する研究史に対する研究代表者の認識を研

究の背景として、アイヌ民族の住居に関する研究の蓄積を踏まえて、北海道の民家史・建築史を「通史」として捉え直すための基礎的研究として、アイヌ民族の住居に関する研究を深めると同時に、従来までほとんど研究の対象とならなかった北海道の近代以前における和人の建築活動に着目し、北海道の民家史・建築史を通史の視点から解明していくことを研究の全体構想として想定した。

## 2. 研究の目的

本研究においては、近代以前における和人の建築活動とアイヌ民族の建築文化を総合

的に研究することによって、北海道の建築・民家全体を、日本における建築史・民家研究史の内に正当に位置づけるための基礎的研究とする事を大きな目的とする。具体的には以下の項目を設定した。

- ①近世期における和人による建築活動
- ②アイヌ民族の住居の成立と変遷過程
- ③建築活動から見た和人とアイヌ民族との関係

### 3. 研究の方法

具体的な研究方法は以下のとおり。

- ①運上屋・会所関係資料の調査、整理分析
- ②アイヌ民族の建築活動に関わる資料の収集整理分析
- ③周辺諸外国の少数民族に関する調査
- ④中世～近世期の北海道で展開された建築活動の総合的理解

### 4. 研究成果

#### 4-1. 和人の建築活動：前幕領期東蝦夷地を中心に

##### 4-1-1. 既往研究の検討

従来の建築史・民家史研究における北海道に対する認識を見ると、近世期末までの和人の建築活動については、和人の定住地であった道南部の一部地域の状況を概観するものの、蝦夷地における和人の建築活動については、限定的なものとしてとらえ、研究は深められていない。アイヌの建築活動についても、近代以降の北海道の建築・住宅の系譜とは異質のものとしてとらえ、歴史的に正当な評価が与えられていない。北海道を対象とする建築史・民家史研究は、開拓使設置以降（1869・明治2年）を研究対象とすることが通例化していたといえる。

以下、主要な研究業績の検討を行う。

『函館市史 都市・住文化編』（玉井他 1995）は、近世期から近代までの都市・住宅史を包括的にまとめた貴重な業績であるが、研究対象は、函館を中心とする和人人地の一部に限定的なものである。

遠藤明久の一連の研究は、北海道の漁家（民家）建築として特徴的な「番屋建築」の歴史的成立過程に関する研究・考察を端緒として、近世期の蝦夷地における和人の建築活動を包括的に研究したもので、記録史料を基礎とする建築史研究としては、近世期を対象とする北海道の建築に関するほぼ唯一の業績ということが出来る。

遠藤は、「番屋建築についての一考察」（遠藤 1951）において、江戸時代の番家（屋）建築について考察し、近世期の場所請負制において、漁場の拡大とともに、新しい漁場に監督人として「番人」が派遣され、この番人の宿舎が「番小屋」もしくは「番家（屋）」と呼ばれ、これが「番屋建築」の起源となった

と指摘している。同時に、番家（屋）、運上家（屋）の具体的な形態についても本文中で述べている（本文割愛）。

さらに「北海道庁所蔵史料から見た運上屋建築について」（遠藤 1951）では、「東・西蝦夷地場所請ヨリ申上」を主要な史料として、東西蝦夷地 47 場所における運上家（屋）・会所の建物数を掲げている。また、忍路運上屋の建物の構成を紹介し、運上屋を初め 20 棟の建物の存在を指摘し、中でも倉庫が多数を占めると指摘している。

また、運上屋の平面構成を示す史料については、2 点の史料を紹介し、運上屋の平面形の標準形式の存在を示唆している。さらに、運上屋の外観については、数点の絵図をあげ、「いずれも切妻屋根で棟に煙出しを設けた板壁造となっていて、様式は大体同一のものであったと考える」としている。

「われわれは、なぜ民家を調査するのか」（遠藤 1973）では、民家調査の目的を述べる中で、北海道における近代以前の民家調査の前提条件として、建築・民家研究の重要な資料である「実物」の民家からのアプローチが、北海道においては困難であることを指摘している。

一方で、現存する古民家の分布は、風土条件、政治・経済・文化などの歴史的条件による差異が大きいこと。本来、民家は実用的な存在で、必ずしも永続的な使用を想定したものではないこと。従って、現存する古民家は、上層階級の上質な建築であるか、地域経済が安定して推移したか、たまたま災害に遭遇しなかった結果によるもので、必ずしも時代の実相をすべて反映しているものとはいえないことを指摘している。

この様な北海道の歴史的条件・背景をふまえて、遠藤は、幕末期までの渡島半島部を除く和人人定住の政治的規制、維新時の場所請負制の廃止と行政庁所在地の移動、ニシン漁業の北進とその衰微、道南における富農階層を生み出す農業経済の欠如、主要市街地の度重なる大火、などの条件が、本格的な民家の成立を阻害したと同時に、古民家を消失させ、近代以前の民家が現存しないのは、存在しなかったのではなく滅失してしまった、と指摘している。さらに、「北海道民家の系譜」（遠藤 1973）においては、前記「北海道庁所蔵史料から見た運上屋建築について」の考察を継承し、後幕領期における蝦夷地の建築活動について述べ、あらたに運上屋の外観を知る資料として「蝦夷紀行」（谷元旦筆、1799 年）図中の運上屋図を重要な資料としてあげている。「幕府直轄時代の住宅」（遠藤 1994）では、幕末期における和人人地の住宅について考察している。

以上のように、本研究の主題である、近代以前の蝦夷地における和人の建築活動に関

連する既往研究の業績を整理すると、研究活動自体が少なく、研究者も限定されること、研究対象とする史料も後幕領期・安政元年（1854）～慶応3年（1867）以降を中心とすることなどがあげられる。と、同時に、北海道の建築・民家研究における本州以南の研究動向とは異なる、新たな視点の必要性に言及する重要な指摘を含んでいるということも出来る。

#### 4-1-2. 近代以前建設の歴史的建造物

北海道に現存する近代以前に建築された歴史的建造物の総数は57件を数えるが、近世期末の和人地を含む渡島・檜山両支庁に所在する建物が48件を占め、蝦夷地に所在した建物は10件に満たない。建築用途で見ると、神社・寺院に関連する建物が49件を数え、住宅・住宅関連6件、運上屋・城郭各1件で、圧倒的に宗教建築が多い。

宗教建築の内、特に神社建築についてみると、ごく小規模な事例については、蝦夷地外で製作され、北前船などの船載によってもたらされたと考えられる本殿小祠が多く含まれている。

以上のように、現存する近代以前の歴史的建造物は大半が旧和人地に所在すること、蝦夷地に所在する事例を含めて、宗教建築が大半であること、加えて神社の小祠については、本州以南から完成品を搬送した例が多数あるものと考えられ、蝦夷地における建築活動とは必ずしもいえないものである可能性が高いことがその特徴としてあげられる。

このように、近代以前の蝦夷地における建築活動の所産を示す現存する歴史的建造物は僅少で、さらに、その大半が宗教建築であり、現存建築物を建築活動に関わる史料とすることには限界がある。

#### 4-1-3. 『東蝦夷地各場所様子大概書』・『東行漫筆』から見た東蝦夷地における和人の建築活動

##### 4-1-3-1. 史料の性格と概要

新北海道史第七巻史料一所載の「東蝦夷地各場所様子大概書」（文化8・1811年成立、以下「大概書」とする）を基本資料とし、『北方史史料集成 第一巻』所載の「東行漫筆」（文化6・1809年成立、以下「漫筆」とする）を補助資料として、前幕領期・寛政11年（1799）～文政4年（1821）の東蝦夷地における建築活動と、その所産である建築物を明らかにする（資料の性格と概要：割愛）。

##### 4-1-3-2. 東蝦夷地各場所の建物概要

本研究では、史料の成立背景、文書体裁を検討した結果、「大概書」が「漫筆」に比べて、より公式の記録文書としての性格が強いものにとらえ、「大概書」を基本史料として建物に関わる情報を整理し、両者に差異がある点については適宜、「漫筆」の記載内容を検討に加えた。

「大概書」および「漫筆」に記載する地域は、前幕領期（寛政11～文政4）における東蝦夷地19場所およびエトロフ島である。

##### 4-1-3-2. 会所建物の特徴

規模について見ると、19場所の会所元およびヲシャマンベ1、ユウフツ場所の千年川サケ売場・買場会所各1の合計22棟の記載がある。最小は48坪（シツナイ場所）、最大は154坪（アッケシ場所）で、80～90坪のもの6例、100坪を越えるもの6例を確認でき、場所毎に差はあるものの、大規模な会所建物が多数存在したことがわかる。

会所建物の梁間および桁行寸法について見ると、梁間は5および5.5間の建物が11例と半数を占めるが、一方で6間を越えるものも6例あり、最大8間（クスリ場所）の梁間を持つ会所建物も確認できる。桁行は最小11.5間、最大24間で、梁間に比べて大規模で広い分布が確認できる。平面形態・規模は梁間側については5間から6間が標準的で、規模の差は桁行柱間数の差が影響している事がうかがえる。

外観や内部造作については8場所で記載がある。建物の配置について記載する事例では、全て正面を西南向（4例：サル・ニイカツ・シツナイ・ホロイツミ）としている。

間取りの構成は（記載4例）、座敷（上座敷・次の間）、帳場（勘定場）・支配人部屋・番人部屋・板敷台所・土間が基本的構成で、規模の大きいものほど座敷数が増加する傾向がうかがえる。

ニイカツ場所では罫出し（増築）に土縁、ネモロ場所では座敷に縁側をそれぞれ持つ旨の記載がある。

クスリ場所は、2間巾の広い玄関で、破風屋根底を持つこと、外構として棚矢来・遠棚矢来・冠木門を持つこと、畳数はおよそ百畳敷。天井無節、床板張りの上質な造作で、贅沢な作りであるとの記載がある。

これらの内部造作に関連して、「漫筆」の前書きには、「一 諸場所会所、番屋畳以来琉球ニ致度候事、一 縁側以来可止事、一 張附カラ紙間ニ合程有之、以来反古張可致事」。の記載があり、幕領に伴う会所関連建物の新築普請にあたり、造作を質素とすべき旨を述べたものと考えられるが、その一方で、前記の様な土縁・縁側附の座敷などを持った贅沢な造作の会所が建てられていたことが確認できる。

会所元を中心とする土塁（土手・囲土手）の設置状況についてみると、「大概書」には記載が無く、「漫筆」では土塁設置の記載があるものはユウフツ場所東6場所で、全場所数の3分の1程度にとどまり、3場所で「囲土手なし」の記載もある。いずれにせよ、会所建物は、面積や構造・造作から見て、各場所における最大規模で、最も上質な建築施設

であったことがうかがえる。

#### 4-1-3-3. 通行家・下宿所・番屋

通行家(屋)・下宿所(旅宿)は、会所元については基本的に存在し、ホロイズミ、トカチ、クスリ、クナシリでは、会所元以外にも所在している。

通行家(屋)・下宿所(旅宿)の梁間は、2~6間の幅があるが、3~4間が主体である。一方、桁行は5~17間の幅があり、梁間に比べて多様な桁行柱間の建物が存在した事がうかがえる。

番屋は、昆布取・出張・鯨取・秋味などの名称を付加した建物の存在が多数確認できる。他に、漁小屋とするものがある。

番屋については、昼休所や通行家・下宿所を兼ねる旨の記載を併記するものも確認できる。梁間は2~6間、桁行は3~13間で、通行家・下宿所と同様に梁間に比べて桁行柱間は多様である。

#### 4-1-3-4. 蔵

蔵は、大きく板蔵・萱蔵・それ以外の構造・仕様に区分され、さらにそれぞれを用途に区分し記載している。

板蔵の梁間は1.5~5間の幅があるが、3~4間の梁間が主体である。桁行は1.5~20間で梁間に比べ柱間数は多様で、規模も1.5~80坪と多様である。

萱蔵の梁間は3~4間、桁行8~14間で、規模は24~56坪と板蔵に比べて大きなものが多い。

板蔵については「仕込蔵・仕込物蔵」と記載するものが最も多く11例。次いで「産物蔵」9例。他に「雑物蔵」、「物置蔵」、「荷物蔵」などの記載があり、なかでも特徴的な事例として、板蔵だけに「塩蔵」、「米蔵」の記載を付記するものがある。

萱蔵は、板蔵と同様に「荷物蔵」、「雑物蔵」の記載があるが、萱蔵だけに付記される名称としては「昆布囲蔵」の記載がある。

その他の蔵は「物置」とするものが多いが、「椀皮葺産物蔵」、「産物草小屋」など、用途上は前記の「板蔵」、「萱蔵」と同様なものの構造・仕様が異なるものと考えられる。

板蔵・萱蔵の構造・仕様については「大概書」および「漫筆」に記述はないが、嘉永7年(1854)頃の記録といわれる「高田屋金兵衛御請負中に別段建候蔵の直(値)段」12)によれば、板蔵については、函館において、あらかじめ切込加工をすませた部材を現地(各場所)で組み立てたもの、木材を現地(各場所)で加工し組み立てたものの大きく2種類の建築方法が存在したこと。萱蔵については、シャクリ板及び茅を支給していることがうかがえる。

これらの名称、値段、支給品に注目すると、萱蔵は屋根茅葺、外部サクリ板(シャクリ板)張りと考えられ、板蔵は萱蔵に比べて坪単価

が高いことを合わせて考慮すると、屋根板葺、外部羽目板張りの萱蔵に比べて、より上質な構造・造作であったと考えられる。

同時に、これら板蔵・萱蔵に比べて粗末な構造・造作の蔵として、屋根を椀皮葺、草葺とする蔵が存在したものと考えられる。また、前記した塩蔵、米蔵の名称が板蔵だけに見える事からも、板蔵が最も上質な構造・造作の建物であったことがうかがえる。

#### 4-1-3-5. 社寺建築

神社は、弁天社15例、稻荷社9例、他に義経社、明神社、蛭子社、住吉社、船玉社、住吉社などの記載がある。神社の規模をみると、最小はウラカワ場所の稻荷社で梁間0.5間、桁行0.5間(0.25坪)、最大はモンベツ場所の義経社で梁間3間、桁行3間(9坪)である。正面・奥行ともに2間、面積4坪程度の社が多い。

仏寺は、ウス場所の善光寺伽藍(建物数6、総建坪80.25)、シャマニ場所の等樹院(坪数87)、アツケン場所の国泰寺(坪数77)が確認出来る。

#### 4-1-3-6. 小休所

小休所は各場所に所在する事が確認出来るが、一方で、場所により粗密の差が著しい傾向がある。これは各場所の規模や領域の性格を反映していると同時に、場所によっては番屋が休所を兼ねるものがあり、小休所の記載が省略されていることが要因と考えられる。小休所の規模、構造をみると、最小は梁間1.5間、桁行2間(3坪)、最大は榎葺屋で梁間2間、桁行6間(12坪)の本屋に、茅葺屋の梁間4間、桁行13間(52坪)を建継(増築)した建物である。規模を記載する23例について検討すると、梁間1.5間、桁行4間(6坪)が11例で最も多く、次いで梁間2間、桁行6間(12坪)が6例、梁間1.5間、桁行2間(3坪)が2例である。以上のように、梁間は1.5~2間が大半であるが、桁行は2~7間で梁間に比べ多用である。

間取り、構造、造作について記載する事例(33例)を見ると、屋根は萱・草葺が大半で、榎・板葺は数例にとどまる。外壁は羽目板張とするものが多いが、草壁のものもある。また「葭簾仮建」の仮設小休所も建てられたことが確認出来る。

#### 4-1-3-7. その他の建物

##### ①酒造関係

酒造関係の建物は、基本的に場所の会所元に所在したと考えられ、以下の4場所で確認出来る。

ヤムクシナイ場所：榎板葺居宅1(5間×15間・75坪)、同板蔵1(4間×9間・36坪)、同酒蔵1(5間×15間・75坪)、水車小屋1(4間×5間・20坪)。シャマニ場所：酒造居小屋1(5間×18間・90坪)、造酒蔵2(4間×6間・48坪)、造酒板蔵2(4間×5間・

40坪)、酒造糶室米搗場1。クシリ場所：酒造家1、酒造板蔵1、酒造土蔵1。クナシリ場所：酒造家1、板蔵1、弁天社1。

#### ②御雇医師宅

医師の居宅として、ユウフツ場所：板屋1(3間×5間・15坪)。シャマニ場所：居宅1(2.5間×3間・7.5坪)が確認出来る。

さらにその他の建物として、鍛冶小屋(鍛冶家)、細工小屋(大工細工小屋)などの記載が確認出来る。

4-1-4、前幕領期の東蝦夷地各場所に所在した建物の特徴

各場所に共通すると思われる特徴を挙げると以下の通りである。

会所建物は各場所において面積・構造ともに最大規模であると同時に、造作についても最も上質の建物である。

会所元には基本的に会所、通行家・下宿所、蔵(板蔵・萱蔵)、神社が所在する。

会所、通行家・下宿所、蔵については、梁間数はそれぞれ標準的柱間数があり、桁行柱間数が規模(建坪)の大小に影響している傾向が強い、中でも会所建物については、梁間の規模が他の建物に比べて大規模で、構造的に見ても質の高いものであった。

板蔵と萱蔵では構造・造作に差があり、板蔵がより上質の蔵と位置づけられている。

番屋は基本的に各場所の会所元以外に所在し、旅宿・休所を兼ねるものもある。

小休所・昼休所などの休所は、各場所で確認出来るものの、その数には粗密があり、規模や構造(仕様)にも差がある。などが挙げられる。以上のように、前幕領期・寛政11年(1799)～文政4年(1821)の東蝦夷地における、いわゆる和人の建築活動の様相を整理し、その特徴を明らかにした。

同時に「大概書」および「漫筆」の記載内容には、各場所ごとに精粗があることから、全場所を俯瞰するための情報要素は、建物名称、建物数に限定され、規模や構造(仕様)についての定量的分析には、さらなる資料の検討が必要であることも明らかになった。

#### 4-2. アイヌ民族の建築活動

アイヌ民族の建築に関する建築学の立場からの研究史を概観すると、主要な研究は1930年代から40年代に限られ、以後、研究は停滞し、調査対象となった居住歴を持つ住居の建築年代も20世紀初頭が下限と考えられる。また、19世紀末以前についての論考の根拠は古老からの聞き取りによる推定が中心で、客観的・系統的な研究は行われていない。

発掘調査を資料とする研究をみても、建築学の立場からのアイヌ文化期を対象とする研究は行われていない。建築学の立場からのアイヌ民族の建築に関する研究には、アイヌ文化成立期(13世紀前後)以後、19世紀末

までの大きな空白期間が存在し、現在の復元建築と19世紀末以前の建築についての実証的な比較・検証も行われていないのが現状である。このような研究の空白期間は北海道の建築史を通史として捉え理解するためにも今日残された重要な課題である。

研究対象資料はアイヌ民族の建築を描く近世期の絵画資料とアイヌ文化期を対象とする発掘成果(発掘報告書)とし、これらの二つの資料群を網羅的に集成・整理することによって、アイヌ文化成立期から近世期末のアイヌ民族の建築を研究するための基礎資料を構築した。

近代以前に描かれた絵画資料は居住歴を持ったアイヌ民族の建築の「実物」やアイヌ民族自らによる記録資料が残されていないことなど資料の制約が多い中で、18世紀中期から19世紀後半におけるアイヌ民族の建築を画像として確認できる唯一の貴重な資料である。

アイヌ文化期を対象とする発掘資料は、前記の絵画資料では確認できない18世紀中期以前のアイヌ民族の建築遺構を確認できる唯一の貴重な資料である。

資料の分析にあたっては、絵画資料や発掘資料から確認できる構造、形態、材料、平面形、規模、施工工程と基準寸法といった研究対象資料群から確認できる要素を中心として考察し、室内空間、集落の立地や集落における建築の配置やその階層性などの、研究対象とする資料からは分析できない要素については本研究から除外した。

本研究によって明らかになった近代以前のアイヌ建築の特徴は以下の通りである。

- ① 住居は平地式、住居に付属する建物は高床式が主体で、住居と倉の高床上本体の外観・材料は共通する点も多い。
- ② 平地住居の平面形は付属屋を伴わない単室形住居が先行し、その後、付属屋を伴う平面形が現れ、両者は併存し、付属屋を伴った住居が主体となって行った。
- ③ 住居の柱配置は短辺の柱間が奇数のものが多く、短辺中央の柱間が出入口や神窓であった可能性が考えられる。
- ④ 柱の建立方式は住居が全て打込形式、住居に付属する建物は掘込形式と掘込と打込を併用する形式がある。
- ⑤ 柱間寸法は住居では人体寸法による基準寸法の存在が想定できるが付属建物では確認できない。
- ⑥ 小規模な住居は地上で小屋組を組み立て柱上に乗せ、大規模な住居は柱の上で小屋組を組み立てる建築構法である。
- ⑦ 住居は小径木材で軸組・小屋組を組立て、小屋構造形式は多様で、室内に梁を架けないものも多い。

以上のように近代以前のアイヌ民族の建

築の特徴を明らかにし、同時に復元建築の検証から、外観・材料などに共通する点がある一方で、現代の復元建築とは異なる多様な外観・平面形態や小屋組・軸組構造の建築が存在したことを明らかにした。

#### 4-3. 周辺国の少数民族の事例：中国在住赫哲族の事例を中心に

##### 4-3-1. 中国に居住する赫哲族の建築文化

本研究では中国の研究・文献資料、現地調査による民族資料・聞き取り結果をあわせて中国に居住する赫哲族の建築文化について概観した。

##### 4-3-2. 中国に居住する赫哲族の現状

現在、中国側に居住する赫哲族は中国全土の総数で4,640人(2000年調査)。黒竜江省内には全体の80%を超える3,910人が居住し、その内、同省の同江市には街津口赫哲族郷を中心に1,060人が居住しているといわれる(赫哲族の近代史：割愛)。

##### 4-3-3. 中国文献から見た赫哲族の住居

以下に示す中国語文献2点の翻訳と内容整理を行った(内容：割愛)。

①載伯龍篇著、細説中華民族建築、中国三峡出版社、2007年。②舒景祥主編、中国赫哲族、黒竜江省人民出版社、1999年

##### 4-3-4. 民族資料・聞き取り現地調査概要

4-3-4-1. 中国赫哲族民族博物館(同江市三江口)の建築文化関連資料：「昂庫」実物大復元模型(詳細は割愛)。

4-3-4-2. 街津口赫哲族郷街津口風景名勝区赫哲民族文化村赫哲展覽館：「昂庫」実物大復元模型・「馬架子」実物大復元模型・「地窖子」・「撮羅子」(昂庫)・「木克梁」・「鈴鐺網房」の縮小模型(詳細は割愛)。

##### 4-3-4-3. 聞き取り調査の概要

聞き取り対象者：同江市街津口赫哲族郷、赫哲族 尤金玉 男性 74才。聞き取り項目は以下の通り(内容：割愛)：居住歴について、住居の作り方、室内の様子、撮羅子について、住居の変化、現在の住居。

##### 2-4. 中国居住赫哲族の伝統的建築の現状

文献資料・民族資料・聞き取り調査から確認できる中国に居住する赫哲族の建築の類型を整理した。定住住居としては堅穴を伴う「地窖子」、平地式の「馬架子」が代表的なもので、それぞれの建築形式を代表する呼称として用いられている。「地窖子」については秋から春までの定住用住居と漁・猟用の臨時小屋があり、構造は基本的に同様ではあるが、質や維持方法には違いが見られ、定住住居については特に高台で洪水のおそれのない立地を選ぶことが特徴としてあげられる。

臨時の漁・猟小屋としては、円錐形の形態が主体で、他にドーム形、切妻形などが見られ、細い枝でアーチ状の主体構造を作り、草・土を葺くものが基本と考えられる。同時

に樹皮や獣皮も使用され、近年には布も積極的に使用されている。

#### 4-4. まとめと今後の研究展開に向けて

本研究の成果と、課題は以下の通りである。  
①近世期蝦夷地場所・会所における和人の建築活動の実相を限定的ではあるが明らかにしたこと。②和人の建築活動が北海道島全域で確認出来、大規模であったこと。③一方、近世期全体を通じた史料の収集が課題。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

1, 日高町に所在する飯田家住宅について：小林孝二，北海道開拓記念館研究紀要，査読無，第39号，PP37-48，2011年

2, 北海道近代建築史の再検討：小林孝二，北海道開拓記念館 北方文化共同研究報告書「北方の資源をめぐる先住者と移住者の近現代史」，査読無，PP141-156，2010年

3, 前幕領期の東蝦夷地各場所における建築活動 - 『東蝦夷地各場所様子大概書』および『東行漫筆』から見た和人の建築活動 -：小林孝二，北海道開拓記念館研究紀要，査読無，第37号，PP83-94，2009年

4, 近代以前の絵画資料と発掘資料から見たアイヌ民族の住居に附属する建物に関する研究 - 熊檻と倉を中心とする住居に附属する建物の特徴，小林孝二・大垣直明，日本建築学会計画系論文集，査読有，第619号，PP157-164，2007年

5, アイヌ文化期の発掘住居跡に関する基礎的研究 - 発掘資料から見たアイヌ民族住居の寸法体系に関する考察 -，小林孝二・大垣直明，日本建築学会計画系論文集，査読有，第615号，PP191-198，2007年

[学会発表](計2件)

1, 北海道における建築歴史学の研究史：水野信太郎・小林孝二他，日本建築学会北海道支部研究発表論文集，PP485-492，2010年

2, 北海道における近代和風建築の特徴：羽深久夫・小林孝二他，日本建築学会北海道支部研究発表論文集，PP373-380，2008年

[図書](計2件)

1, アイヌの建築文化再考 - 近世絵画と発掘跡からみたチセの原像 -，小林孝二，北海道出版企画センター，289P，2010年

2, アイヌ文化成立期から近世期末におけるアイヌ民族の建築に関する研究，小林孝二，私家版，250P，2008年

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

小林 孝二 (KOBAYASHI KOJI)  
北海道開拓記念館 学芸部 研究員  
研究者番号：80142090